

---

# 堂々美女と世話焼き男子 - 始まりの闇の中

榛名屋 忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

堂々美女と世話焼き男子 - 始まりの闇の中

### 【Nコード】

N8288N

### 【作者名】

榛名屋 忍

### 【あらすじ】

「堂々乙女と秘密の美女」「堂々美女と下僕男子」の続編。モデル・佳恋の恋人となり、リス力癖が治りつつある桐原悟のもとに決別した不良時代の友人がやってきた。やがて、それがトンデモナイ事件と繋がっていき・・・。

## 夜の始まり（前書き）

読者の皆様へ

この作品には未成年者の飲酒・喫煙のシーンが登場しますが、未成年者の飲酒・喫煙は法律で禁止されています。筆者は未成年者の飲酒・喫煙を認めているわけではありません。また、設定上リストカットという言葉が登場しますが、筆者はこのような行為を認めているわけではありません。

詳細な描写はしておりませんが、不快に思われる方がいらっしゃるかもしれないので、前書きとして書かせて頂きました。問題なければ続けて本文をお読みください。

## 夜の始まり

俺の家に佳恋さんが住むようになって、二週間が経った。佳恋さんには客間を貸しているけれど、夜になると監視だと言つてちよくちよく俺の部屋に出入りする。おかげでリス力は一度もしていない。「悟くん、今日、仕事関係の飲み会で遅くなると思ふんだけど」夕方、佳恋さんは出かける支度をしながら、部屋にいる俺に向けて言った。

「わかりました」

特に何も考えずに応えようと、佳恋さんは足音を立てて部屋に入ってきた。

「わかりましたじゃないわよ！ちゃんと一人で眠れるの？」

「…眠れるに決まってるでしょう。子どもじゃないんだから。」

「そういう意味じゃないわよ。一緒に暮らすようになって二週間経つけど、まだ時々リスカしそうになってる。」

「それはそうですけど…」

俺はたじろいだ。リスカ癖は治ったわけではなく、相変わらず夜中に目が覚めて手が震えることがある。

「とにかく、辛くなったら電話入れなさいよ。すぐ帰るから」

「…ありがとうございます」

佳恋さんの気遣いには素直に感謝を述べる俺なのだった。

## 突然の来客

佳恋さんが出かけた後、知らない番号から執拗に電話がかかってきた。あまりにうるさいので何度目かに観念して出てみると、電話の向こうから明るい声が響いた。

「悟う！連絡先も知らせんと消えて。一体何処へ行っただんか、心配してたんよー。」

「は？」

「俺の声、忘れちまったのか？冷たい奴やなー。保住や。同中の保住やで。」

それはかつて中学時代に仲の良かった友人の声だった。

「ほ、保住？！何で俺のケータイ…」

「常盤から教えてもらったんよ」

「常盤の奴…」

「ついでに家もな。お、もう着いたで。」

「はあ?!」

「ヒカルとサチも一緒や。酒もあるで。今夜は飲み明かそうなあ」  
電話の向こうでは騒がしい声がする。

「サトー！元気か？ヒカルだぞおー」

「悟ちゃん、サチもいるよん」

「酒持ってきたって、ふざけるな。お前ら未成年だろ」

「給料もらって働いている身で、酒を飲まないなんてありえんやろ。」

保住が電話を取り返して言った。

「まさか…お前ら、働いてるのか？」

同中で悪さばかり働いていた三人だ。まともに働いているなんて信じられない。

「俺は建築会社、ヒカルとサチは介護ヘルパーや。なあ、立ち話もあれやし、入れてくれないか」

「待て待て。」

粘ってはみたものの、どうにも引き下がりそうもない。佳恋さんは帰りが遅くなると言っていた。佳恋さんが帰るまでなら良いか、と腹を決めて三人を招き入れた。

「ほんま久しぶりやなあ」

やんわりとした口調は保住慶太。キレると恐いが普段はおっとりしている。このグループのまとめ役だ。

「サト、連絡よこさないなんて、水くさいぞお」

ちよつと馬鹿っぽい喋り方は岸川晃。口調と比例する赤点メーカー。喧嘩っ早いのでよくトラブルを起こしていた。

「悟ちゃんがない間に、ウチら結婚しちゃったんだよ」

唯一の女子は金谷幸子だ。いや、待て、

「結婚?!」

「そ、ヒカルちゃんと結婚したの」

ということは岸川幸子か。やけに冷静になってしまったが、遠藤と一番仲良くしていたのがこのサチだった。

「サトは大学で彼女できた?」

「ヒカルちゃん疎い。玄関に女物の靴があつたの、気づかなかつた?」

サチはヒカルをつついた。

「同棲とは悟も隅に置けん奴やなあ」

「相変わらずサチは鋭いな」

俺は三人につられて笑ってしまった。遠藤の事件があつてから、中学を去るしかなかった俺は、この三人に何も告げないで引越した。連絡もしないまますでに四年が過ぎていた。四年の月日を埋めるため、俺たちはずいぶんと長い話をした。

「な、前みたいにイツキ見せて」

酔ったヒカルが焼酎の入った瓶を持って言った。

「禁酒中なんだよ、今」

「いいじゃん、一杯だけなら」

ヒカルに便乗してサチも言い出した。

「そうやな、ええんちゃう？」

「やめろつて、こら」

三人がかりで押さえつけられ、俺は焼酎を一気に飲んだ。久しぶりの味に身体は驚いていた。飲めないことはなかったが、俺は息苦しくなって席を立った。流しにあったコップで水を飲む。席に戻るうとするが、まっすぐ歩くこともままならない。

「悟う、大丈夫か」

「トイレで吐いちまったほうがいいぞお」

「そう、だな」

二人の忠告を聞き入れて、俺はトイレに駆け込んだ。しかし、段々と意識がもうろうつとしてきて、

いつの間にか目の前が真っ暗になっていた。

## 女優登場

何分経過したかわからない。

「なあ、サトの奴遅くないか」

沈黙の中、ヒカルが切り出した。

「マジでやばいんじゃないの？」

ヒカルの言葉を見無視して保住は静かに酒を口に入れる。

「さるとるちゃん、大丈夫？」

サチはトイレの戸を叩いた。その時、玄関から響くガチャリ、と鍵の開く音に、三人は反応した。

「悟くん、ただいま」

佳恋は部屋に踏み入れた瞬間、酔っぱらいの三人を見て驚いた。

「酒くさっ！！」

「あれー、もしかして、悟ちゃんの彼女？？」

真っ先に反応したのはサチだ。

「ま、そんなところよ。ところで、あなたたちは悟くんのお友達？」

「そーっすけど」

ヒカルは頭をかきつつ応えた。

「悟くんは？」

「トイレで吐いとる」

保住は何食わぬ顔で応えたが、佳恋は冷静ではいらなかった。

「まさか、お酒飲ませたわけ？」

「サト酒強いから」

「禁酒中だっていうのに……。わかったわ。トイレね。」

トントンとドアを叩いても、出てくる気配がない。

「さーとーるーくん」

返事もない。物音もしない。何か嫌な予感がして、佳恋はトイレの鍵をこじ開けた。悟は息苦しそうに床に倒れていた。

「まじかよ」

トイレの様子を見て、三人はおろおろとし始めた。佳恋は息を吐いた。

「ちょっとあなたたち、落ち着きなさいよ。厄介なことになったわね。」

「かれーん、そろそろ入っても良いかな。」

「父さん、とりあえず彼を看てくれない？」

入ってきたのは佳恋の父親だ。医師として働く彼は、学会の帰りに佳恋と会う約束をしていた。佳恋の彼氏を見るつもりだったのだ。それがこんな出会いになるうとは。

「典型的な急性アルコール中毒だね。知り合いの病院へ運んで処置してもらおう。」

「お、俺たちはどうなるんすか…」

ヒカルが呟いた。俯く三人に、佳恋は語りかけた。

「悟君はやさしいから、あなた達を責めないと思う。でも、あなた達は自分のしたことを反省しなきゃダメね。あなたたちだって、未成年でしょ？」

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

幸子は深く頭を下げた。佳恋は三人を部屋から出し、車に悟を乗せ、父の知り合いが居るといふ救急センターを訪ねた。

処置自体は軽いもので、熟睡してたままの悟は病室に移された。

佳恋は病室の前の長椅子に座り、朝を迎えた。

「眠くないのかい？」

父の言葉に佳恋は頷いた。

「最近は熟睡なんてしてないの。だから慣れちゃったみたい」

「桐原君には夜中にリストカットする癖があるのか？うつすらと傷が見えたが」

「ここ数週間はやってないけれど、長い間そうだったみたいよ」

「佳恋は同情しているのか？」

「違う…と思う」

「同情と恋愛を混ぜてはいけないよ」

「わかってる」

「わかってないな」

父はため息をついた。

「どうして？」

「彼が良い奴だってことは、父さんもよく知っている。優の友だちでもあるからね。けれど、今の佳恋はそんなことよりもまず、”自分が”助けなければという気持ちに駆られているんじゃないか？」

「…」

「そんなものは恋愛じゃないんだよ。彼の通院歴を見れば、救うなんてことが単純なものじゃないとわかるはずだ」

「ちよつと、彼のことを調べたの？」

佳恋は思わず立ち上がった。

「彼の父親が来てね。さっき担当医に話したんだ。こうやってかっぎ込まれるのは初めてでないと…」

そこに優が青ざめた顔をしてやってきた。

「姉さん、悟どうしちゃったの？」

佳恋はそこに居られなくなって駆け出した。一瞬見えた姉の涙に、優は硬直した。

「姉さん？」

「桐原君のことは佳恋から説明してもらうつほうがいいだろう」

「何があつたの？父さんは知ってるの？」

「ああ」

## 病室にて

優は何も聞かずに病室の戸を開けた。まだ目を覚ましたばかりの俺は驚いた。

「優？」

小さく声を発した俺に近づくと、優は平手打ちをした。

「悟、何してんだよ。何で姉さん泣いてんだよ。何で僕に相談してくれなかったんだよ…」

優は声を震わせていた。

「ごめん。俺、よく覚えてないんだ…。佳恋さんは？」

「どこへ行ったかわからない」

昨夜は酒を飲んだことしか覚えていない。佳恋さんはあの場にいるんだろうか。居たような気がするのは錯覚なのか。

「そうか…」

「なあ、説明してくれよ。悟の隠してること」

「わかった」

俺はゆっくりと口を開いた。俺が中学生の頃は不良だったこと、遠藤の事件があつて不良を辞めたこと、そして、その時からリストカット癖が始まったこと。佳恋さんには話していたが、優には告げないままにしていたことだ。

「昨日はよく覚えていないけれど、酒を飲まされてパニックになって。リスカは、してないと思う。」

手首に新しい傷はない。酔った勢いで、なんてことはなかったようだ。

「ってことは、高校時代もリスカしてたんだ」

優は少し悲しげな表情だった。

「隠しててごめん…」

「下宿してたって、嘘？」

「ああ、学校の裏の病院に住んでた」

「だから、一緒に帰りたがらなかったんだ…」  
「ごめん」

俺はその言葉しか言えなかった。よく見ると、優はもう悲しい顔をしていなかった。

「謝らなくていいよ。姉さんにちゃんと説明してくればさ。」

優は小さく微笑んで、病室の戸を開けた。

「姉さん探してくるから、待ってて」

優は外に出て扉を閉めた。その時、突然病室の電気が消えた。カ  
ーテンが閉め切られた部屋は真っ暗になった。

暗闇に俺は脅えていた。誰かが俺の肩を叩いた。

「誰?!」

「俺やで」

「ほ、保住か…驚かせるなよ」

「これ、見てみい」

懐中電灯に照らされていたのは、一枚の写真だった。写っているのは俺と佳恋さん。場所はマンションのベランダだ。

「人気モデル・カレン、大学生と同棲。記事にしたら大事件やな」

「え、保住？」

「はい、手え上げて」

頭に何かが当たる。おそらくは銃だろう。手の震えを抑えながら、  
ゆっくりと両手を上げた。

「一発で楽にしたるからな」

「俺を殺すのか？」

「頼まれたからなあ」

俺には何も解らなかった。ただパニックが起きないようにと必死  
で耐えていた。

## 屋上の二人

屋上に佳恋は居た。鈴音はその姿を確認して、扉を開けた。

「佳恋さん！」

「鈴ちゃん、どうしてここに？」

「悟さんのお見舞いです」

「そっか…そうだよね」

「佳恋さんは悟さんのところへ行かなくてもいいんですか？」

沈黙の後、佳恋が口を開いた。

「ねえ、鈴ちゃん。私、悟ちゃんと付き合ってたいいのかな？」

「何言ってるんですか！佳恋さん、悟さんのことが好きなんじゃないんですか？」

「好き、だよ。でも…」

「でも？」

言葉をかき消す銃声に屋上の二人は耳を疑った。

「佳恋さん、今のって…」

「銃声よね…悟ちゃんと優は下に？」

「はい」

「行きましょう」

## 裏切り

頭に当てていたはずの銃はそばにあった鏡に向けられ、発砲された。鏡は木っ端みじんに割れていた。破片が飛び散って当たったのだろう。頬を血が流れているのがわかる。

「本物やて、わかったか？ ほな、本番や」

再び頭に当てられた銃から、俺の震えだけじゃない、保住の震えも感じた。

「リス力癖の悟なら痛さは慣れてるやろ。ほな、行くで」

その時、足音と、ドアを開ける音がした。保住の後ろに誰かが立っていた。

「銃を降ろせ」

「嫌やわ」

「降ろせって」

声ですぐにわかった。優だ。異変に気づいて戻ってきたのだろう。

「一般人巻き込んだらあかんよなあ、悟」

保住は振り返らなかった。その手はいつそう大きく震えているよ  
うな気がした。

「早く終わらせような」

言った後だった。保住は声をあげて倒れた。優にはそんなこと  
できるはずがない。振り返るとそこに佳恋さんが居た。

「驚いた。まさか銃を持ってるなんてね」

「佳恋さん…」

「姉さん、危ないじゃないか」

「優も同じじゃない」

「確かに…」

二人はお互いの顔を見て笑った。

「悟、無事か？」

遅れて入ってきたのは常盤だった。

「常盤先輩、何でここに？」

「ずっと保住を張ってたんだよ。穂澄組の組長の孫だからな。何か掴んでるんじゃないかと思ってね」

警察手帳と手錠を手に、常盤は胸を張っていた。

「と、きわ…？」

起き上がった保住はまだ銃を握っていた。

「こらこら、保住。観念しろよ。遠藤の話、聞いちゃったんだから。」

「…」  
「どういうことだ？」

「遠藤と薬で遊んでたのは保住だったってわけ」

「え…」

俺は目を丸くした。

「え、知らなかったの、悟？」

保住は銃を手から落とした。

「俺はてつきりお前が…」

常盤は保住を取り押さえた。

「さ、悟、ごめんな…。ヒカルとサチにも謝つといてな。あいつらは何も関係ないから。」

「いや、お前から謝れよ、保住。」

「悟…」

「それから遠藤のこと…ちゃんと説明してくれよな」

「ああ、ほんま、すまなかった」

保住は脱力した顔でその場を去っていった。

「また助けられちゃいましたね…」

俺は申し訳なくて、それなのに、佳恋さんが居てくれることが嬉しくて、思わず笑ってしまった。それに対して佳恋さんは複雑な表情をしていた。

「助けられてないじゃない…」

呟いたと同時に俺を抱きしめた。佳恋さんは泣いていた。前にも

似たようなことがあった。でも、涙を見るのは初めてだった。

「怪我してるじゃない」

「あ、これ。大したことないですよ。」

よく見ると腕にも少し傷はあるようだ。どれも軽くなかったようなものだが、血が滲んでいるので驚かせてしまったらしい。

「保住の言う通りかもしれないです。リスカばかりしてたから、痛みが気にならなかったのかも」

次の瞬間、佳恋さんは頬を思いつきり叩いた。

「痛！」

「馬鹿！死んだらどーすんのよ！！相手は銃を持ってたのよ。」

そう叫ぶと佳恋さんは大声で泣き喚いた。

「ごめんなさい」

俺と優は佳恋さんの背中をさすった。

「昨日のことは何も覚えていないんです。」

「… 悟くんの馬鹿」

「ごめんなさい」

「早く手当てして貰ってよ」

佳恋さんは俺の腕を引っ張った。

「だから、大したことないですってば。全部かすり傷ですって」

## 入院生活の暗雲

数日後、俺はまだ病院に居た。病室には常盤先輩が何度か来て、保住のことを話していった。穂澄組の抗争が収まるまでは病院に居るといふ。佳恋さんは仕事でしばらくは来られない。優はというと演劇の合宿で不在。そんなわけでこの病室には鈴音が見舞いに来ていた。

「悟さん、寂しくないですか？」

「…何で？」

「佳恋さんがいないからですよ。寂しくありませんか？」

俺は数秒置いて口を開いた。

「寂しい、かな」

「悟さんって素直なんですね！」

鈴音が俺の腕をつついた。

「鈴には言ってもいいかなーってさ」

俺は目を合わせずに言った。鈴音はくすくすと笑っている。

「私だって、優さんが合宿で寂しいです。悟さんの気持ち、わかります。でも、」

彼女はバッグから一枚の写真を取り出した。それは保住が俺に見せた写真だった。

「写真を撮られるのはダメですよ。彼女はうちの専属モデルなんです。スキヤンダルはKAGURAのブランドイメージにも関わりますからね」

「その写真…何で…」

「出版社の方はちゃんと口止めをお願いおきましたから」

「え！どうやって？」

「KAGURA関係の記事を書きたいなら、自重してくださいよって」

「えええ…KAGURAって凄い…」

鈴音は俺の反応を見て、またくすくすと笑っていた。

「とにかく、悟さんも気を配ってくださいよ。彼女のモデル人生を台無しにしないように」

「わ、わかったよ」

鈴音は段々と社長らしくなっていく。平井綾子という名で出会ったときの姿からは想像もできない。俺はまだ未熟で、彼女にまで迷惑をかけている。少し不甲斐ない気がした。

数日後の夕方、突然佳恋さんが訪ねてきた。

「急にどうしたんですか、お仕事忙しいんでしょう？」

「ええ…でも、どうしても悟君に伝えておきたいことがあって…」  
「何です？」

「貴方が倒れた日に、父が側にいたの」

「えっ…」

「あなたのことは、全て伝わっているわ」

俺は驚いた。俺が今まで周囲に隠しながら生きていた色々な秘密を一気に知られている。しかも、彼女の父親に。

「でもね、父は私のことを叱った。あなたのことは、何にも責めてないわ」

「そ、そうなんですか…」

「それで、私も隠していたことを、あなたに伝える決心をしたの。」  
「隠していたこと？」

佳恋さんはあえてこちらを見ないようにしていた。

「私、ずっと前に悟くん会ったことがあるの。悟くんは覚えていないだろうけど」

「えっ…いつです？」

優とは会っても佳恋さんには会ったことがないものだと思っていた。思い当たるような出来事もないのだが。

「私が短大生の時よ、あの病院の近くにアパートを借りてたの」

俺は視線を落とした。佳恋さんは俺のことを”初めから”知っていたのだ。

「朝、病院の玄関ホールで男の子がパニックを起こしてて、看護師さんがなだめてた…」

俺の震える手に気づいて、佳恋さんは手を伸ばした。俺はその手を払いのけた。

「確かに、それは俺ですよ」

視線を合わせられない苦痛。佳恋さんは少し間を置いて続けた。

「私、気になってたの。それが貴方だと、後から知って」

「…可哀想とか思ってたんですか？」

「そうじゃないの、違う…」

佳恋さんは首を振る。しかし俺の声は次第に大きくなっていった。「じゃあ何ですか？リスカする人間と…パニック起こす人間と…どうして一緒に暮らしてるんです？」

結局俺って、面倒みなきやって思われてるだけで、佳恋さんは俺が普通になったらもう…」

俺は気づいたら病室を飛び出していた。広い待合室を走り抜け、病院の外に出たときだった。俺は大男たちに捕えられた。

「何だ？」

男たちは無言のまま俺を車に押し込んだ。

## 事件は終わっていないかった

「待て！」

常盤の声が虚しく響いていた。常盤は俺を見張っていたのだ。病院から拉致されたなんていったら大失態である。俺がいくら抵抗しても、男たちは黙っていた。車が何処へ向かっているのかは、さっぱりわからなかった。そして、いつの間にか俺は眠ってしまった。

「目え覚めたか？」

「ん…」

目の前に居たのは警察に捕まったはずの保住だった。俺は腕も足も縛られ、動きがとれない状態だ。

「保住、何でお前が…？」

「何でって、俺には共犯がおんねん」

保住の指差す方向に目をやると、そこに常盤がいた。

「常盤先輩？ いや…」

俺ははつきりとしらない意識の中で、重要なことに気がついた。

「あいつには双子の弟がいたな」

「正解」

保住は銃を片手に笑っていた。

「お前が何も知らないにしても、消えてもらわなきゃ困るんだよ」

そんな保住を常盤弟・常盤健二は冷たい目で見ていた。

「保住、銃貸せよ」

「け、健二さん…」

「お前、撃つ気ないだろうからさ」

保住は震える手で銃を健二に渡した。

「この間も見に行ったけど、撃ち損なってさ。穂純組の幹部候補が、これでいいのかよ。」

健二は銃を握りしめて笑っていた。

「健一になりすますのは面白かったよ。ホンモノの健一は今頃お前を探しているだろうなあ。病院で張ってたのは確かなんだぜ。」

俺を殺すつもりだからだろう、健二は饒舌になって、計画の全てを話し始めた。

「保住は組の幹部候補になったが、他の奴らから昔のお遊びについて指摘されちゃったわけ。それで、秘密を知っていそうなあんたを殺すことが出来たら幹部候補として認めてやるって言う話になった」銃をいじりながら話す健二を保住はおどしながら見ている。

「だけど、健一の野郎が先にお前をマークして、保住の手先が捕まった。それで、保住の相棒を俺が買って出た。それなりの地位に就けてくれることを条件に協力することにしたんだよ」

「健二さん…やっぱり俺…」

保住は突然立ち上がった。健二は銃を保住に向けた。

「今更辞めるっていうのは無しだぞ。こんだけ危ない橋渡ったんだからな」

「悟が何も知らなかったなんて、聞いてない。全部先輩が言い始めたことだろ!!」

「じゃあ、お前はもう要らないな。」

俺は縛られた身体をとつさに動かした。どうやらここは倉庫らしい。近くに積み上げられていた木箱が崩れた。

「くそっ」

一足先に健二が逃げ出した。しかし、その先に立っていたのはもう一人の常盤―常盤健一だった。

「嫌になっちゃうよね、弟の面倒を見るのって大変」

「てめえ」

「ほずみん、サンキュー」

「どういうことだ、健一」

「ほずみんが、アジトの情報を俺に流してくれたのよ。かつての親友に銃口を向けたのがかなり堪えたみたいだね」

「保住のヤツ!」

保住は佳恋さんが捕らえていた。

「佳恋さん、どうして…」

「健一さんに乗せてもらったの。話は最後まで聞かないとダメなのよ。こんな風に、大変なことになっちゃうんだから」

保住を警官に引き渡すと、佳恋さんは俺を縛っていた縄を解いてくれた。

「悟くん、話の続きをしましょ」

俺は病室に戻された。佳恋さんは、今度はきちんと俺の目を見て話し始めた。

「確かに、可哀想だつて思ったこともある。優があなたと歩いているのを見て驚いた。あの男の子が、あなただつてわかって。でもね、私が今、悟くんのことを好きなのと、それとは別のことなのよ。」

佳恋さんの表情には一点の曇りもなく、とても堂々としていた。

「親友である優を助けてくれたこと、何度もあつたでしょ。私が成金社長と食事するとき、上手く交渉してくれたのも悟くんだった。私、悟くんのそういうところを見て、段々好きになつていったの。」

笑顔で語る佳恋さんを見て、俺はその表情に引き込まれていくように感じていた。

「悟くんがリス力をしなくなっても、悟くんは悟くん。当たり前のことじゃない」

俺はいつからか泣いていた。

「すみませんでした…」

「いいのよ。何の説明もなく転がり込んだ私がダメだったのよ」

「いえ、そんな…」

「明日、また来るから、私の告白に、返事をちょうだい」

「えっ」

「今のは告白。だから、明日までに返事を考えておくこと。今夜はドキドキして眠るの。」

「わ、わかりました。」

そう答えて、俺たちは別れた。

俺は枕元の封筒に目をやった。中身は知っている。今頃父も準備をしてくれているはずだ。

## エンドロールはプロローグ

俺はチケットを握りしめ、空港へ向かった。空港では父がスーツケースを携えて待っていた。

「行くんだな」

「うん」

「体調はもう良いのか」

「大丈夫」

俺はスーツケースを受け取る。

「頑張つて行つて来いよ」

病院へ行くと、悟は退院したという。マンションに行くと、部屋は綺麗に片付いていた。机には置き手紙が残されていた。姉さんはその手紙を開いた。

「悟くん、勝手だよ…」

そこにはこう書いてあった。

『この部屋は自由に使つて構いません。要らなくなったら鍵を置いて行つてください。』

僕は数日前、悟から転学するという話を聞いた。しかし、行き先は知らない。突然のことに驚いて聞かないままになっていたのだ。携帯電話は手紙の横に置かれている。連絡のとりようがないことを示していた。

「私、待つてる…」

「姉さん？」

「悟くんは必ずここに戻つてくると思うから」

手紙を握りしめ、姉さんは呟いた。

「だって、私まだ返事もらつてないもの。悟くんがちゃんと返事をくれるまで、待つてるわ」

KAGURAのオフィスに鈴音はいた。悟からという電話を秘書から受け取る。

「悟さん？これって国際電話…」

「そうだよ、モスクワにいる」

「モスクワ？」

「佳恋さんには黙っててほしいんだ」

「どうして？」

「心配かけたくないから」

「そんな、連絡もなしに居なくなる方が心配です！佳恋さん、驚いてらっしゃって…」

「いや、今の俺は佳恋さんと付き合ってちゃいけないんだよ」

「悟さん、あの…」

電話は切れていた。公衆電話、リダイヤル不能。鈴音は電話を置いた。

サンクトペテルブルクの朝。俺は荷物も解かないまま、寮のベッドに横たわっていた。電話が鳴る。相手が誰なのか解っていた。

「久しぶりだね、母さん」

「着いたならすぐに顔を出しなさい」

「そうだね、ごめん。疲れたんだよ」

「皆さんに伝えないまま来たんですって？お父さんは怒っていらしてよ」

「それでいい、それでいいんだよ…」

俺は勝手に電話を切った。全てはもう一眠りしてからにしよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8288n/>

---

堂々美女と世話焼き男子 - 始まりの闇の中

2010年10月8日12時12分発行